

新潮45

2011
7

昭和30年8月4日
第三種郵便物認可
平成23年7月15日発行
(毎月15日発行)
(6月15日発売)
第31巻第7号
(通巻311号)

片山社秀
猿の群れから
アシズムまで
**国
の
死
に
方**

佐伯啓思
**溶
解
す
る
技
術
文
明**

特集

**福島の苦悩と焦燥
愛国と原発** 竹田恒泰

岡本太郎「明日の神話」をめぐる「レベル7」

榎木野衣
美術評論家

渋谷駅の大壁画に悪戯した奴は誰だ？ 核戦争の絵に福島第一原発を補足した芸術集団のメッセージとは。

渋谷駅の連絡通路に設置されている岡本太郎の「明日の神話」がおかしなことになつてゐるのを知ったのは、雑誌の編集長を務める関西の友人がツイッターで送つてくれた簡易メールのことだった。

メールには、見慣れぬ絵の写真が添えられていた。東京電力・福島第一原子力発電所の事故現場を思わせる歪んだ建屋とお化けのようなキノコ雲。そんな絵が、巨大な壁画である「明日の神話」の右下のコーナーに補足されていたのだ。

補足といつても、原画を隠すかたちで上から新たな絵柄を乗せているわけではない。もともと「明日の神話」の左右の下部には、習作の段階では見られなかつた画面の大幅な欠け部分がある。福島第

一原発の絵は、この欠け部分を補うかたちで足されているのである。だから、ほど細部まで元の絵を覚えていない限り、なにかが付け加わったようには見えない。

むしろ反対だろう。当初は、どこが足された部分かわからず、該当する箇所を見て「岡本太郎の絵は福島第一原発事故を予言していた」と信じ込む向きもあった。と聞く。通報を受けて現場に来た警察も、言わなければどの部分が問題の箇所なのか見当がつかなかつたに違いない。むしろ、警察の手で現物が押収されると、絵は元に戻つたというよりも、何かが足りなくなつたように見えたに違いない。

つまり、この原画への補足行為は、文字通りの意味で「補足」であつても、結

れてちょうど百年の節目にあたり、NHKでの伝記ドラマや東京国立近代美術館での大回顧展など、年初から多くの催しが開かれていたからだ。当然、都内有数の一大駅の、もつとも人通りの激しい場所に設置されたこの代表作にも注目が集まつてしかるべきだった。

私は、大学への通勤で渋谷駅を使っているから、この壁画の前も頻繁に通るけれども、岡本太郎が生誕百年だからといって、この絵を見に人が集まっているのを見たことがない（せいぜい、たまにちらほらと見掛ける程度だ）。むしろ、設置されて数年を経た今では、すっかり風景の一部に溶け込んでしまい、ほぼ存在すら忘れていたのではないか。とりわけ、2月26日の岡本太郎の誕生日を軸に企画された一連の記念事業は、それから間もなく未曾有の大震災が起つてしまつたから、人々の気持ちがそれどころだろう。その点で渋谷駅での「明日の神話」をめぐる今回の出来事は、少なくとも人々の目をもう一度、岡本太郎の壁画



岡本太郎「明日の神話」全図 提供／財団法人岡本太郎記念現代芸術振興財団

果的には「欠落」感を生んだことになる。しかもその欠落は、新たに生み出されたものというよりも、もともと絵に備わっていたものだつた。だから、今回の一件は表現としてなにかを付け加えたというよりも、もとある絵の忘れられたいた性質を浮かび上がらせたと言つてよい。

こうして今回の一件は、（私がそうであつたように）ツイッターを通してまたたく間に広まつたから、「明日の神話」が設置された通路には連日、現場を見ようと多くの見物客が訪れ、岡本太郎の壁画は、にわかに注目を浴びることになった。たつたいま「にわかに」と書いたけれども、本当は適切な言回しではない。というは、2011年は岡本太郎が生ま

に向かわせる起爆剤となつた。つまり、絵の内容を乗つ取るというよりも、元の絵をもつと「よく見る」ための機会をつくり出したのだ。そこから見えてきたものはなにか。そもそも、なぜ元の絵に欠落があつたのだろう。最初にそのことから始めよう。

当然のことながら、画面に欠落のある絵というのは不自然なものである。実際、私も今年に入り岡本太郎の作品集の監修を記念企画として手掛け世に出したが（『岡本太郎 爆発大全』、河出書房新社）、全体のうち主要な一角を占める「明日の神話」の図版写真に関しては、最終的な完成作となつた渋谷駅のものは使わず、その前に描かれた習作（といつても巨大なもので、単独の作品として見ることができる）のうちのひとつを載せている。理由は、この習作には欠落部分がなかつたからである。

念のために言つておけば、「明日の神話」に左右下部の大きな欠けが生じてしまつたのは、岡本太郎のせいではない。既知の方には余計な話となるが、この絵



Chim↑Pom 「LEVEL 7 feat.『明日の神話』」
2011 ミクストメディア
© 2011 Chim↑Pom
Courtesy of Mujin-to Production, Tokyo

ことだつた。風雨にさらされ、破損の酷かつた本作が日本に持ち帰られ、大規模な修復を経ていくつかの企画を渡り歩き、最終的な設置場所が渋谷駅の通路に定まつたとき、太郎ばかりか敏子の顔もそこにはなかつた。

このような数奇な運命を辿りながらも、「明日の神話」の欠落部分は、その途中で失われたわけではない。最初からなかつたのだ。設置される予定だつたオーテル・デ・メヒコの設計上の都合で左右の端が收まり切らず、太郎は数年を費やして辿り着いた本作の形状を変更せざるをえなかつた。太郎もいろいろと考えたようだが、この不自然な条件をのんで、なんとか壁画の絵柄を構成し直していくには、ホテルの壁にぴったりと収まつたことだらう。けれども、渋谷駅の通路ではその必要がない。今の設置状況がどうか不自然に見えるのは、そのためだ。今回の「補足」も、実際にはこうした過去の事情を抜きには成り立たなかつた。もしも「明日の神話」が最初から絵とし

ての自然な比率を持つていたとしたら、どこに絵を足したとしても、結局、見栄えのしない蛇足にしか思えなかつただろう。

彼らの名は「Chim↑Pom」

この一件からまもなく、インターネット上のユーチューブを通じて、この補足部分が設置される際の作業風景が、とあるアート・ユニットによって投稿され話題となつた。これに続き、都内のスペースでは「REAL TIMES」と題する小さな個展が開かれ、そこでは渋谷で警察に押収された絵の原画も展示されていた。

彼らの名は「Chim↑Pom」（以下、チンボム）といい、一人の女性と五人の男たちからなるグループで、個展に先立つて開かれた内覧会では、今回の一件が彼らの手によるものであることが正式に発表された。

すると、奇妙なことが起つた。それまで主にネットのなかで交わされていた論調も、大きく変化したのだ。端的に言えばネガティヴなものが多くなつた。理

由はおおむね共通していた。「なんだ、結局アートだつたのか」「なぜ個展をしなければならないのか」「そもそも名乗りをあげる必要があつたのか」……こうした非難は、押し並べて言えば最初のゲリラ的行為に対する匿名性が壊れたことをめぐる失望の表明といつてよい。

私はといえば、当初から今回の補足を単なる迷惑行為などではなく、きちんととした表現（アート）とみなす必要を感じていたから、その経過が本人たちにより明確に明かされたことを歓迎した。法律の専門家でないのでの法的な解釈まではわかりかねるが、少なくとも原作への毀損や破損が一切見当たらないことや、なによりアートの歴史に準拠する複雑なコンテキストを包み込んでいることを念頭にいれたとき、真摯な美術批評の対象に値する。逆にこの補足が結局、その主体をあきらかにされず、匿名の英雄的行為か、もしくは度を越した悪戯として語られるだけであつたら、結局それは「都市伝説」として一時的に人々の口に上るだけ終わつてしまつただろう。

この一件からまもなく、インターネット上のユーチューブを通じて、この補足部分が設置される際の作業風景が、とあるアート・ユニットによって投稿され話題となつた。これに続き、都内のスペースでは「REAL TIMES」と題する小さな個展が開かれ、そこでは渋谷で警察に押収された絵の原画も展示されていた。

彼らの名は「Chim↑Pom」（以下、チンボム）といい、一人の女性と五人の男たちからなるグループで、個展に先立つて開かれた内覧会では、今回の一件が彼らの手によるものであることが正式に発表された。

すると、奇妙なことが起つた。それまで主にネットのなかで交わされていた論調も、大きく変化したのだ。端的に言えばネガティヴなものが多くなつた。理

由はおおむね共通していた。「なんだ、結局アートだつたのか」「なぜ個展をしなければならないのか」「そもそも名乗りをあげる必要があつたのか」……こうした非難は、押し並べて言えば最初のゲリラ的行為に対する匿名性が壊れたことをめぐる失望の表明といつてよい。

私はといえば、当初から今回の補足を単なる迷惑行為などではなく、きちんととした表現（アート）とみなす必要を感じていたから、その経過が本人たちにより明かされたことを歓迎した。法律の専門家でないのでの法的な解釈まではわかりかねるが、少なくとも原作への毀損や破損が一切見当たらないことや、なによりアートの歴史に準拠する複雑なコンテキストを包み込んでいることを念頭にいれたとき、真摯な美術批評の対象に値する。逆にこの補足が結局、その主体をあきらかにされず、匿名の英雄的行為か、もしくは度を越した悪戯として語られるだけであつたら、結局それは「都市伝説」として一時的に人々の口に上るだけ終わつてしまつただろう。

「明日の神話」と「原発震災」



Chim↑Pom 「気合い 100 連発」
2011 ビデオ
© 2011 Chim↑Pom
Courtesy of Mujin-to Production, Tokyo



Chim↑Pom 「REAL TIMES」
© 2011 Chim↑Pom
Courtesy of Mujin-to Production, Tokyo

めて備わっていたのではないか。そう私は推測する。必然的にそれは、「核エネルギー」で担保される「未来」に対して、「いのち」を燃やすことで切り開かれる「明日」を据えることになるだろう。「明日の神話」の画面中央で核爆発を受け、今まさに白骨化しつつある人類の姿は、

そうした未来のテクノロジーに対抗して、プリミティヴな生命力だけで闘うことになる今日の私たちの姿を先取りしたものとなっている。

もつとも、「明日の神話」に核戦争は描かれても、「原発震災」は描かれていらない。また、21世紀になって（今の

水爆実験で降下した大量の放射性物質、いわゆる「死の灰」で被曝した焼津の遠洋マグロ漁船、「第五福竜丸」の被災に多くを負っている。この事件は結果的に日本に核と放射能の脅威を呼び覚まし、広島・長崎の再検証が本格化し、国内では反核運動が空前の盛り上がりを見せることになる。岡本太郎は、この核のモチーフを、20世紀・下半期の美術が担うべき最大の主題として捉えたのであろう。

この頃より原水爆を扱う一連の作品を手掛け始める。この系譜は、メキシコでの「明日の神話」と同時期に並行して制作された大阪万博での「太陽の塔」とともに、スケール的にも巨大な次元に達し、

さて、一部ではよく知られているようない、「明日の神話」は核戦争の絵にほかならない。そのことは当初、この絵が「ヒロシマ・ナガサキ」という別名を持つていたことでもあきらかだ。けれども、絵の着想自体は1954年、太平洋のビキニ環礁で秘密裏に行われた米国による

水爆実験で降下した大量の放射性物質、いわゆる「死の灰」で被曝した焼津の遠洋マグロ漁船、「第五福竜丸」の被災に多くの脅威を呼び覚まし、広島・長崎の再検証が本格化し、国内では反核運動が空前の盛り上がりを見せることになる。岡本太郎は、この核のモチーフを、20世紀・下半期の美術が担うべき最大の主題として捉えたのであろう。

ここで、「明日の神話」というタイトルに改めて着目してみたい。「明日」と「神話」の組み合わせからなる、この逆説的な言葉の意味するところは本人の口から語られておらず定かではない。が、

時期的に考えたとき、このタイトルが大阪万博での一大テーマ「人類の進歩と調和」の対極に置かれた反対主題（「対極主義」）は反対物を対置して極度の緊張を

岡本太郎の生涯を通じて最大のプロジェクトとなる。

実は、大幅に変更されてしまつたため

であったことは十分に想像できる。実際、

大阪万博では、会場へ福井の美浜原発か

ら電力供給がなされており、人類の「明

るい未来」を約束する「進歩と調和」の

ために、「原子力の平和利用」が欠かせ

ぬエネルギー源として想定されていた。

これに対し岡本太郎は、テーマ館のプロデューサーを引き受けたにもかかわらず、「人類の進歩と調和などは嘘っぽい」と公言し、実際、展示でも一貫して

進歩も調和もない人類の根源的エネルギーとして「生命（いのち）」の力を打ち出していた。つまり、人類に「未来」があるとしたら、それは科学技術の発展による見せかけの進歩や調和などではなく、

神話にあるような原初の生命力に根ざすしかない、というメッセージである。

そう考えてみたとき、「明日の神話」という言葉自体に、多くの災厄をくぐり抜けるなかで神話に託された人類の命が持つ根源的エネルギーを通して、大阪万博が唱えた樂觀的な「人類の進歩と調和」に対抗するという命題が、あらかじ

作り出すために岡本太郎が唱えた手法であったことは十分に想像できる。実際、大阪万博では、会場へ福井の美浜原発か

ら電力供給がなされており、人類の「明るい未来」を約束する「進歩と調和」の

ために、「原子力の平和利用」が欠かせぬエネルギー源として想定されていた。

これに対し岡本太郎は、テーマ館のプロデューサーを引き受けたにもかかわらず、「人類の進歩と調和などは嘘っぽい」と公言し、実際、展示でも一貫して

進歩も調和もない人類の根源的エネルギーとして「生命（いのち）」の力を打ち出していた。つまり、人類に「未来」があるとしたら、それは科学技術の発展による見せかけの進歩や調和などではなく、神話にあるような原初の生命力に根ざすしかない、というメッセージである。

そう考えてみたとき、「明日の神話」という言葉自体に、多くの災厄をくぐり抜けるなかで神話に託された人類の命が持つ根源的エネルギーを通して、大阪万博が唱えた樂觀的な「人類の進歩と調和」に対抗するという命題が、あらかじ